

令和2年度 第2回和光市協働推進懇話会 会議録

日時： 令和2年11月11日（水） 14時00分～16時00分

場所： 和光市役所6階 602会議室

委員：

学識経験者	◎粉川 一郎（武蔵大学社会学部メディア社会学科 教授） ○庄嶋 孝広（市民社会パートナーズ 代表）
市民団体を代表する者	山川 由美子（NPO 法人みんなで元気）
公共的団体を代表する者	加山 秀夫（和光市自治会連合会） 松井 妙子（和光市社会福祉協議会）【欠席】 片山 義久（和光市商工会）
協働推進庁内調整委員会	中川 大（政策課）
協働推進ワーキング	清水 佑輔（資産戦略課）

◎会長 ○副会長

事務局：市民活動推進課 野中、田中、林、小向、冨田

傍聴者：4名

開会

【事務局】ただ今より、令和2年度第2回和光市協働推進懇話会を開会する。開会に先立ち、協働推進懇話会 粉川委員長よりご挨拶願いたい。

【粉川会長】今回は、2つの大きな議題がある。皆さんより忌憚ないご意見をいただきたい。

1 令和2年度実施 協働提案事業 中間報告

【粉川会長】本年度事業を実施している、心を込めた花で明るい街づくり（実施団体：和光おもてなし隊）の中間報告を事務局より願います。

【事務局】協働事業の概要及び報告会の内容について資料説明。県制作の取材動画の鑑賞。

【粉川会長】各委員の質問、感想を願います。

【庄嶋委員】オリンピック・パラリンピックが夏に行われるということで、本事業も綿密に計画されていたが、大会が延期となった。それでも、今年度の前半は規制が多いなかで、花の種類や植え付ける時期を変更したり、できる範囲で子供たちの経験を増やす活動を行っていることも評価できることである。気になる点は大会が来年度に延期され、どうつなげていくのかということ。経験を生かし、スケジュールを立て直して行われれば良いと考える。

【粉川会長】来年度について、事務局に説明を願います。

【事務局】もとのコンセプトがオリンピックの際に和光市を訪れた外国人選手であったり、観客をおもてなしするところで採択されている為、来年度の予算を計上して継続して行く方向で進めるべき事業である。今年度の経験を生かしさらに広げていく為、花苗の育成をしている市民団体へ活動を繋げていくことを団体・担当課・事務局で議論している。

【山川委員】来年度も協働事業として継続して行くということか。

- 【事務局】従来協働提案事業は、予算として担当課が計上し、協働事業として継続していく。昨年行った通訳サポートの協働事業も、今年度は総務人権課と活動継続をしており当課はチェックを行っている。
- 【清水委員】事業のなかで人と人のつながりを感じる。学校と調整して何かを行うことはかなり労力があることであり、その壁を乗り越えて子どもたちに経験を与えられることは大変評価できる。
- 【粉川会長】傍聴に来て下さっている和光おもてなし隊の皆様にも発言をいただきたい。
- 【団体】コロナでスケジュールが大幅変更となった。学校と調整するために校長会にも参加し、17校すべてではないが「おもてなし通信」を手渡しし、説明を行ってきた。昨日、全校の花の植え付けが終了。子供たちの笑顔が見れ、花の手入れについての話もできた。今後も顔を出して様子を見ていきたい。楽しみである。
- 【粉川会長】通信を持参して手渡しするところが肝であると感じた。
- 【庄嶋委員】チラシを見させていただきイメージがよく伝わってきた。団体専用のジャンパーを制作されたとのことで、街での活動時に市民への認知度も高まるだろう。プリンター等の支出面を確認させていただきたい。
- 【事務局】支払いの内容は、花のプリンター120個、約25万程度。培養土と諸道具、花の苗、プリンター用ラベルで計上している。ジャンパーに関しては、寄付からの支出。
- 【中川委員】差し支えなければ、寄付はどこからのものか、いくらほどなのかお伺いしたい。
- 【団体】スタートするにあたり、募金や協力金で2万ぐらい。おもてなし隊の事業費で賄い、全部で57、58万ぐらいかかっている。
- 【粉川会長】協働事業の中間報告に関しては以上とする。来年度に開催する協働推進懇話会で事業評価を行うので関心を持っていただき、ご協議をいただきたい。

2 和光市の協働における課題について

～With コロナ、After コロナ時代の市民活動、市民活動支援について～

- 【粉川会長】次第2について、事務局から説明をお願いしたい。
- 【事務局】和光市の協働における課題について説明。今回は、第1回懇話会でいただいた議題の中から、課題に特化し、皆様が実際に活動して気づいたことやお困りのことなど、具体的な課題を発表いただきたい。次回の第3回懇話会で具体的な解決策のための議論を行いたい。
- 【粉川会長】和光市のなかでの協働の課題、いわゆる市民活動や地域活動に対する課題について、まずは市民の方々から伺いたい。
- 【片山委員】会議で集まらない為 zoom や IT 機器を使って開催せねばならず、機械を使えない人が取り残されてしまうのが課題。最近はハイブリット的な会議が行われており、何人かが会議室、残りは Web 上からの参加となると、公民館で開催したいとなった時にインターネット回線が必要となる。市で整備していただければ、コロナ禍でのセミナーや会議を開きやすくなる。
- 【山川委員】通常 60 代から 90 代の高齢者に関わることが多い。独居の方、家族と同居していても関係がギクシャクしている方がおり、そのような方の孤立感、孤独感を少しでも取り除けるように、繋がっていますよという意識を持ちながら活動してきた。3～8月の自粛期間は月に一回、オーラルフレイル予防（オーラルは口、フレイルは虚弱。硬いもの食べづらくなったり、滑舌が悪くなったり、加齢に伴う口の衰えが、栄養不足や気持ちの落ち込みなどを引き起こす現象やその過程）や脳トレ、体操の教材、エッセイ、読み物などを制作。スタッフが

媒介者になるといけないので接触を考慮し、自宅にポストインしていた。反省点としては、印刷物が届くことを嬉しかったとは言っていただけだが、一方通行になってしまった。夏に緊急搬送されて施設に入所になった方や、残念なことにお亡くなりになってしまった方もおり、気になる方にはもう一步突っ込んだ取り組みを私たちが持てなかったのかということ。

■問題点として感じたのは、

◎高齢者の方が世の中との接点が不足していたこと。1人で家にいると時間を持て余し、認知機能も身体機能も落ちてしまう。介護保険を使わない元気な老人と会うことが多いが、このような時間が続くと介護保険を使い始める時期が早まってしまう心配がある。

◎片山さんがおっしゃった情報の手段も課題であり、高齢者は紙ベースになってしまう。高齢者を対象に zoom を使った講座を開催したが、ネット環境が整っていなかったり苦手との意見がある。誘導したり、促したりする情報手段がなにかあるとよいと感じた。

◎高齢者のできることを地域に活かすイベントを年に2回ほど行っているが、今年度は開催できていない。開催目的は、若い世代と高齢者の距離を縮め、お互いを理解し身近に感じ、知り合いを増やして地域を強くしていくこと。このような取り組みができず、他世代との交流が減り、高齢者の孤立化が進んでいくことに懸念を持っている。

■要望としては、

◎災害時に聞ける地元ラジオ

◎スマホの使い方を分かりやすく教えてくれるような支援

◎これからの活動は屋外で行うことが多くなってくる。和光市にある樹林公園は県が管理しており使用手続きが手間である。

・和光市に樹林公園の手続きの窓口ができるとよい。

・職員とは別に、担当してくれるコンシェルジュがいるとありがたい。

◎循環バスを使いやすくしてほしい

【加山委員】自治会もイベントは中止となり、地域の人々の結束、絆、コミュニケーション、団結を強めることができていない。みなさん顔を合わせておらず、自治会として役にたっていない。防災訓練もできず、なにもやっていないじゃないかとの指摘もある。そのつど説明はしているが、会費を返金して欲しいと言われる自治会もあるという話を聞いている。まれではあるが、財政的に余裕のある自治会は年に一回バス旅行へ行っていたが、開催できないため千円づつ返金したと聞いている。12月に防犯パトロール・ごみゼロ運動開催の話がでていますが、参加しないという自治会もあり参加率も低い。今後、自治会を退会したいとの要望も出てくるであろう。どうしたら良いかという解決策が見いだせずにいる。

【事務局】本日欠席の松井委員より課題が届いているので代読する。

■問題点として感じたのは、

◎社協が支援する活動団体・活動者・活動の対象者の多くが重症化リスクの高い高齢者で、活動自体をためらい、中止となっている。

◎これまでの活動の印象から抜け出せず、新しい生活様式に応じた活動への活動形態に変えていくアイデアが出にくい。

◎集会所などを使用する際の消毒用品の購入の負担が団体では困難。

◎マスクをして来館しても話す時にマスクを顎にかけてしまい、飛沫感染のリスク軽減よりも活動への気持ちが勝ってしまう場面が多々見受けられる。

■改善された点

◎会食ボランティア役員と協議した結果、会食ボランティアを行うことは当初、調理技術を活かしたボランティアという感覚で、見守りの機能があること、そして包括支援センターにもつなぐことができる地域包括ケアシステムの一部という気づきを得られたことから、パンを配るという「調理をしない活動」として再始動することができた。

【粉川会長】市や職員の立場から発言をお願いしたい。

【中川委員】外に出ることがない部署になり市民の方との繋がりがほとんどないため、自分の話となる。学童保育の役員をやっているが、ほとんどの事業ができない状況である。松井委員のお話にもあったようにコロナが契機となり、本当に必要な事業とは何か、見直す機会となっている。

【清水委員】「産官学」で大学・市民の方と、zoomを使ったオンラインの市民参加型ワークショップを行っている。新しい生活様式のなかでのひとつの手段であり情報を共有してはいるが、人と人のつながり、人の温もりがなかなか感じられない。先ほど出ていた「行政の情報の支援」を市の立場から話させていただく。ネット回線を使えない公共施設が多く、使用できる施設やできない施設の情報は市から発信してはいるが、行き届いているかといわれるとそうでもない。情報の提供の仕方というのが今後の行政側の課題である。屋外での活動というのも今後の流れになっていく。

【粉川会長】和光市で今なにが起こっているのかお話しいただき、多様であった。市の職員が市の状況を知らないのが非常に大きな問題である。それこそが、最大の課題ではないか。

和光市以外の地域をご覧になっている庄嶋委員のお話をお伺いし、論点をだしていきたい。

【庄嶋委員】皆さんからお聞きしたことが私の住んでいる大田区でも当てはまり、他の自治体でも共通している課題である。私自身の活動の中での話になるが、中学校のPTA会長をしており、今年は例年のような活動ができないのが分かっているので、会費を半額にした。小学校のおやじの会では、秋口から「できることはできる形でやろう」と変わってきて、毎年行ってきたペットボトルでロケットを作って飛ばす大会は11月に行えた。保護司も行っており、保護観察中の対象者とは月に2回の面談をしているが、現在は電話でのやり取りが中心である。イベント開催に関しては、第3波の話も出てきている中、3月くらいのイベントをどうするのかという話とともに、できない場合の判断基準を作ろうとしている。青少年関係のイベントでは、若者の青年実行委員の意志を尊重して、準備を進めることにした。大田区では、秋口からの活動再開に必要な感染予防の費用について、補正予算を組んで区で補助している。

【粉川会長】傍聴でいらっしゃっている和光市民の方々からも、コロナの状況のなかでの活動について伺いたい。

【和光市民】朝のラジオ体操を行っている。小さい子が参加するようになったら、年配者や親御さんが一緒に来るようになり参加者が増えてきた。30~40名ほどになり、大きな公園で間隔に気をつけて活動している。子どもが増えて年配者の方が喜んでくれるようになった。

【和光市民】おもてなし隊でも活動をしているが、テニス活動をしており、市の施設を使って市民大会も開催している。県とも連携をとり市民活動を行っている。テニスは屋外活動で、ソーシャルディスタンスも保たれておりコロナ対策がしやすいスポーツだと認められてきている。屋外で活動しているテニスプレーヤーの皆さんは、元気に活動している。大会では、検温・消毒などに注意しながら進めている。山川さんの話であったが、コロナ禍で高齢者が行き詰まり孤独になってしまっている。テニスは屋外でのびのびと健康的に行えるスポーツであり、

最初はできなくてもボール遊びからはじめていただける。外に出て、みなさんと一緒にコミュニケーションをとっていけるということを心に留めていただけたらと思う。なにかでお役にたてればと考えている。

【粉川会長】次の第3回懇話会で話し合う議論の具体的な絞り込みを行う。ひとつ大きな問題として私たちが考えなければならないのは、高齢者に対する対応。コロナで余計に孤立してしまう高齢者に対してコミュニケーションをとり、実際に外に出てきていただくことを促していかないと、直接命に関わることであり、認知症の発症リスクも上がってしまう。高齢者の孤立対応に関して、市民・行政の立場でなにができるのかを考える必要がある。高齢者の孤立対応としてできることは、コミュニティ・人と人の繋がりを地域の中でどう取り戻していくか。自治会が中心となって頑張っていたきたいところではあるが、それが、できないという現実がある。復活させるためのキーワードは、イベントやお祭りなどの人の集まり。もう一度復活させていこうにも、どういった問題をクリアすれば実行できるのか考えたい。安心して参加できるガイドライン・ルール作りを考えていくことが必要なのではないか。多世代交流に繋がっていく大事なポイントである。新しい生活様式に私たちが慣れていくポイントとなるのはメディアである。パソコンやスマホのスキルアップ、全体的に底上げをしていかなければならない。和光市にはメディアがあるのか。

【事務局】現在はない。以前は4市でのラジオがあった。

【粉川会長】電波メディアは災害時に役に立つ。

【山川委員】市のラジオ放送を作してほしい。

【粉川会長】和光市の施設のネット設備の状況はどうか。

【清水委員】施設の不備はある。パソコンでzoomを繋げるための回線の設備はない。

【片山委員】それは和光に限らずである。

【粉川会長】行政からの情報提供が市民にきちんと届いていない。行政の情報も、行政に伝わっていない。市民の情報も行政側がキャッチしきれていない。行政からの情報発信を市民側が見れるところが一番重要であるが、逆に市民側の情報を行政側に伝えていく、情報の回路の部分がコロナでより重要な課題となってきた。モビリティの件、地域のバスが使いにくいというのも大事な論点のひとつである。高齢者が外に出るには、安心・安全な移動手段が必要である。その他、論点などあったら発言をお願いしたい。

【清水委員】「多世代交流」というキーワードがコロナ禍で非常に大事になってくることを、頭の中に留めて議論していきたい。

【粉川会長】「多世代交流」は高齢者の孤立解消とコミュニティの再生に繋がる大事な論点である。

【片山委員】市民活動では組織というものが大切である。PTAや自治会では、例年決まってきたことが今年では中止となったことで、次年度はどうするか、熱量の低下、予算の減少などで活動自体がすたれていってしまうのではないかと心配している。

【粉川会長】大事な論点である。経費や金銭面の問題がある。地域の組織の継続性・情熱をどう持続するかが課題である。皆さん、金銭面では困っていませんか。

【山川委員】困っています。持続化給付金を使用する予定。新しく立ち上げた団体をどう支援していくかということも行政側に担っていただきたい。団体を継続するためにもお金がかかる。金銭面でも力添えをいただきたい。

【粉川会長】継続性を確保するために、お金の論点も必要。提案された議題をまとめる。

- ①高齢者の孤立
- ②コミュニティの再生（つながりの復活）
- ③組織の継続性
- ④多世代交流
- ⑤スマホ・ZOOMリテラシー
- ⑥行政情報提供
- ⑦モビリティ（移動手段）
- ⑧お金が足りない

次回の議題として、このような提案がされた。この中から深めたい論点や、明日にでもすぐ取り組めるような課題があったら発言をお願いします。

【山川委員】全部が含まれるとすると「コミュニティの再生」であると思う。

【片山委員】第3波が来ていることを考えると「多世代交流」は難しいのではないかと。回覧版・掲示板等の「情報提供、情報流通を整えること」が最優先だと思う。

【加山委員】最優先するのは「高齢者の孤立対策」だと思う。回覧版は衛生上、不要と言われてしまう。

【中川委員】直ちに取り組めるということと、費用対効果の点から「情報系」であると考え。市民側からの情報を得ないと、本当に必要な支援が行政側からできない。また、情報の提供については、即効性があり、お金をかけずにできるのではないかと。

【清水委員】協働というテーマから考えると「コミュニティの再生・つながり」の課題を解決していくことが大事だと考える。結果として高齢者の孤立をケアできればいいと感じている。

【粉川会長】行政の情報を地域や市民にきちんと伝えていき、市民の情報もキャッチしてもらうこと。つまり、情報の流通を促進する課題が1つ。それを何のためにやるかということ、繋がりの再生であり、その時に人口的に一番多くて困っている高齢者をどうしていくかということ。これは両方一緒に議論できるものである。

【庄嶋委員】それぞれの人達が抱えている課題を解決していく上で、情報の上でも共有され、可能な限りの対面でのリーダー同士の繋がりがコミュニティの再生に繋がっていく。0か1かという状態が、この半年は様子見で続いてきた。20なのか80かの差はあるが、感染状況をみながら打つ手を考える必要がある。「全体の中で、取り残さない」ことが大切。コロナによって一斉休校が始まった時に、家庭内でのDVや虐待などの問題も起こった。行政やコミュニティで意識した活動をしていくべき。

【粉川会長】皆さんからリアルなお話を聞き、何に困っているのかをお聞きすると、地域の課題を協働でどう解決していくかなのではないかと。今回は4つの点を中心に、地域や行政に具体的にどう働きかけをしてもらうのかを議論していく。

- ①高齢者の孤立
- ②コミュニティの再生（つながりの復活）
- ③スマホ・ZOOMリテラシー
- ④行政情報提供

「コロナは悪いことではなかった」という話も出た。変えていくきっかけにもなる。イギリスではロックダウン時に、ボランティアの登録件数が増えた。今までは震災があると、助け合い・絆など、震災のあった地域の局地的な絆が生まれていた。現在は日本全体で危機的状況にあり、地域やお隣さんが気になる人が、出始めた。これはよいチャンスである。地

域の人々の貢献を引き込むよい機会と考え、後押しができればよい。どなたか言い残したことはあるか。

【清水委員】情報提供の部分で、市民の方々からどういう情報を求められているのか、どういう発信方法が望まれているのかのお話を伺いたい。一方通行になりがちな情報提供の仕方に互換性が生まれていくようにするにはどうすればよいか話し合いたい。

【粉川会長】我々も行政に上手に分かりやすく伝える必要がある。

【庄嶋委員】コロナによる新しい生活への対応は、早ければ早いほどよい。高校生や大学生はオンラインの活用への順応性は高く、親世代も同様にオンライン活用などでできることをしている。新しいことにチャレンジすることを踏みとどまってしまう人たちのことを考える必要があり、高齢者が中心のコミュニティである自治会は、なかなか行動が起こせない。若い世代や子育て世代がコロナ禍で培ったノウハウを、高齢者のコミュニティにどう適応していくかが大事である。

【粉川会長】困っている人を取り残さないためにどうするか。

【庄嶋委員】こういうときだから、若い世代にコミュニティに積極的に関わってもらえるチャンスなのではないだろうか。未来を想像しつつ、コロナの時代の解決策を考えてもよいのではないか。また、こういった議論をしている間にも、和光市としてウィズコロナ時代の市民活動を進めるために取り組んでいることもあると思うので、そういった情報提供もいただきたい。

3 その他

【粉川会長】次第3のその他について、事務局から説明をお願いしたい。

【事務局】資料のわこらぼ通信を用いて協働事業の現状について説明。

イベントが少しずつ戻ってきているが、団体によりコロナ対策の温度の違いが見られ、多様化している。交流スペースも以前のように予約なしで使用できるようにし、少しずつ団体が戻ってきている。来年1月に協働の講演会を行う。

■事務局から連絡

□次回会議について

第3回協働推進懇話会

日時：令和3年1月13日（水）15：00～17：00

場所：和光市市役所6階 602会議室